

令和元年6月27日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02584

研究課題名(和文) 多言語文献と図像・文物資料によるモンゴル時代の東西交流の実態解析

研究課題名(英文) On the Extensive Exchanges across Eurasia during the Mongol Period

研究代表者

宮 紀子 (MIYA, Noriko)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60335239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：『モンゴル時代の「知」の東西』を公刊した。上下2巻23編の論文から構成される。冒頭で13-14世紀のユーラシアの東西交流を具現する典籍・碑刻・細密画・工芸品・出土文物を約40件紹介し、ペルシア語古写本、ヨーロッパ諸語資料、漢籍、日本の年代記・日記・抄物の記述(学界未知の文献も含む)を以て詳細かつ平易な解説を施すことによって、研究全体の見取り図とした。中国の科学・歴史の分野での利用に供するべく、ペルシア語で書かれた資料 フレグ・ウルスの『イル・カン天文表』に関する記事、ラシードウッディーンが14世紀初頭に著した『集史』『踪跡と生物』『珍貴の書』の中国に関わる記述について、詳細な訳注を呈示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

13-14世紀のモンゴル時代の人・モノ・情報の交流を、多言語文献・図像資料・出土文物等を用いて描出した。文献の質量では漢文とペルシア語資料群が並び立つが、両方をそれなりの水準で扱い一望しようとする研究は稀れである。東洋史研究者が『集史』『五族譜』以外のペルシア語資料やヨーロッパ諸語資料を原典・写本レヴェルから検討し、イラン学・西南アジア学の研究者が中国に関する記述の日本語訳注を提供することはほとんどないので、一定の価値がある。日本の抄物の併用もいまのところ誰も行っていない。ラシードウッディーンの農書や医学書の訳注は、こんごの中国科学史の研究の前進、何らかの作用を及ぼすことが期待できる。

研究成果の概要(英文)：I published a two-volume book entitled "Knowledge" in East and West during the Mongol Period" which consists of twenty-three monographs. This book opens with 40 color photographs of the documents, inscriptions, miniature paintings, artifacts, archaeological finds et cetera. Because all is the evidence showing cultural or political exchanges across Eurasia in 13th-14th century, therefore as substitute for introduction, I attempted to explain them minutely and intelligibly by historical sources written in various languages. For providing the researchers of Chinese Science and Chinese History with useful information, I also translated some articles which refer to cross-cultural exchange between the Hulegu's ulus and the Dai on yeke Mongqol ulus in Nasir al-Din Tusi's Zij i-Ilkhani(Astronomy) and Rashid al-Din's works, as Jami'al-Tavarikh (Historiography), Asar va Ahya'(Agriculture) and Tanksuq namah(Medicine) from the original Persian, and wrote notes on them.

研究分野：モンゴル時代史

キーワード：モンゴル時代 東西交流 大元ウルス フレグ・ウルス ラシードウッディーン 抄物 ペルシア語 中国科学史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

13世紀初頭、チンギス・カンの登場によって幕を開けた「モンゴル時代」の中国は、それまでの伝統文化や価値観が徹底的に破壊され、見るべきものは口語で書かれた元曲や平話といった新しい芸能分野のみ、と長い間考えられてきた。しかし、歴史・哲学・文学・美術といった学術分野の垣根を取り払い、中国・台湾・韓国・日本の各所蔵機関に於いて、モンゴル初期から Dai ōn yeke mongyol ulus 大元大蒙古国治下において刊行された漢籍（元刊本、元刊本を覆刻あるいは重刊した明刊本・朝鮮版・五山版、抄本）を総覧すべく調査を開始し、文書・石刻・地図・絵図・出土文物・工芸品等のモノとともに分析してゆくと、通念を覆す学界未知の資料や新事実が次々と出現した。

すなわち、朝廷の主導・莫大な資金援助のもとに、朱子学が大元ウルス治下に広められ、分かりやすさを旨として挿絵や平易な文体による解説を附した書籍が陸続と刊行されたこと、南中国での出版事業が爆発的な展開を見せた結果、今日のアジアに共有される豊かな文化の基が構築されたこと、内蒙古のカラ・ホトから出土した漢籍の断片の数々が日本に蔵される版本や抄本によってその書名を特定され、この時代の漢籍がユーラシアの東のみならず西へも輸出されていたこと、等が明らかとなったのである。

また、モンゴル朝廷の文官・仏僧たちと安南・高麗王朝・日本国の外交使節や留学僧たちの交流も具体的な様相を呈して浮かび上がってきた。とくに日本の中世の漢籍受容の実態については、五山版はもとより、国語学者によって日本語資料として使用されている抄物（しょうもの。公家や高僧による漢籍の講義録・訳注ノート・漢籍の欄外への直接の書き込み、受講生による聞き書き）・日本の年代記・随筆・日記が有効な手がかりとなること、抄物には中国で散逸した書物の抜粋や書誌データが録されており今後の活用が望まれること、2009年の北京大学における講義等、国内外において機会あるごとに強調してきた。

以上については、この5、6年で急速に「常識」となりつつある（『モンゴル時代の出版文化』、『モンゴル帝国が生んだ世界図』、展示図録『学びの世界 中国文化と日本』、『両足院学問と外交の軌跡』等参照）。

こうして、20年近く漢籍・抄物の調査を継続するいっぽうで、カラ・ホトを經由する陸路、泉州・広州を經由する海路によって西方へと輸出されていった漢籍の道を辿るために、「モンゴル時代の東西交流」を具体的に実証するために、『元史』等に見える夥しい固有名詞・外来語を正確に把握するために、何よりモンゴル時代の真の理解、研究のさらなる展開・深化のために、ペルシア語・アラビア語・テュルク語・モンゴル語・イタリア語・フランス語・ロシア語等の習得に努め、それら諸言語の文献・画像資料の収集を国内外に於いて開始した。

そして、それらをこれまで収集してきた漢文資料と詳細に比較照合し、分析を加えた結果、モンゴル時代のユーラシア東西における政治や文化の交流を示すいくつかの新事実が判明した。たとえば、

憲宗モンケが中東遠征中のフレグ大王のもとに常德を派遣した目的は、東西の薬草の名前の照合・統一にあった。

フレグ・ウルス（Il-khan 国）初期の宰相で科学者としても名高い Naṣīr al-Dīn Tūsī に中国史と天文学の概要を教えた医師の名は傳野（字は孟質）。

14世紀初頭に中国語からペルシア語に翻訳された叢書 *Tanksūq nāmah* の医学書原本は、抄物によって、李嗣『晞范子脈訣集解』十二巻と確定される。

フレグ・ウルスにおける度量衡や金銀比価の統一、鈔の導入、農業奨励といった経済政策は、大元ウルスから遣わされたボロト丞相（『集史』のモンゴルおよび大元ウルス関連の記事の唯一無二のインフォーマント）の助言を聞きながら実行に移された。

カラ・ホトから出土した大量の糧食支給に関する文書断片・半印勘合帖子、『元典章』をはじめとする漢文資料に見える“支帖”は、塩引や茶引と同様、ムスリム商人・ウイグル商人たちの *barāt, ḥavālah* 為替手形を前提に成立しており、書式もそれを踏襲する。

フレグ・ウルスの歴代カンは、大元ウルスのカアンの認可のもとに即位し、カアンから下賜された漢字の印璽を用い、カンに仕える有力な丞相たちも漢字の職印・称号をカアンから下賜されていた。

各ウルスの行政用語（徴税・戸籍作成等）・特殊概念に関して、明らかにテュルク・モンゴル語を中心に介した各種言語の対照表や翻訳辞書が存在し、書記たちはそれを参照した。したがって、フレグ・ウルスやその後継勢力のカンや王族が発令した各種命令文や、『集史』の「チンギス・カン紀」（『元朝秘史』『聖武親征録』と同じくモンゴル語の『金冊』を基本資料とする）及び「ガザン・カン紀」収録の令旨を翻訳する場合には、原文のモンゴル語を意識して、『元典章』等の直訳体・用語を参考にし、とうじのペルシア語と漢語の行政用語・概念の対応を明確にしてゆく必要がある。

モンゴル政権は、当初より多芸多才の人材の発掘・囲い込みに熱心で、technocrat 技術主義者を輩出する集団として儒・道・仏の三教のみならず、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教等の各宗教・教団を優遇し税金を免除したり、教団施設の補修や新築に際して莫大な資金を援助し、古今東西の「知」の融合・革新のために「出会いの場」を設定、書物の編纂・製作を先導していた。

などである。以上は、漢籍を眺めているだけでは決して知り得ず、また悟りえなかった事実といていい。一言語一分野に限定されない研究も必要なこと、明らかだろう。

2. 研究の目的

「モンゴル時代を中心とする東西資料の外来語分析」の研究により、抽出・整理された膨大なペルシア語・ヨーロッパ諸語の資料中の中国語の音訳表記のデータ、『元史』をはじめとする漢文資料の外来の地名・人名・部族名・特殊用語のデータ、多言語辞書から、とうじの音訳の法則、意識のパターンが明らかになってきた。この知見をもとに、あらためて『集史』、『ヴァッサーフ史』、『オルジェイトウ史』などの歴史書、さらには類書・地理書・各種技術書の中国にかかわる部分を再検討し、厳正・詳細な訳注を呈示する。また、『元史』の再編纂を見据え、これらの資料の外交使節団と漢文資料の外交使節団の記事を整理し、年表を作成するほか、関連資料の博捜 正使・副使の特定や派遣の目的の究明(伝来する国書との照合) 東西資料による各種儀礼(即位・迎賓等)の比較分析などの作業を行い、政権レベルでの東西交流の実態を明らかにする。

いっぽうで、漢籍や抄物、鎌倉～江戸期の年代記・日記・随筆等からモンゴル時代にかかわる記事を抽出してほかの多言語資料と照合・分析する作業、イスタンブル・イギリス等の所蔵機関に蔵される大元ウルスの記述を含むペルシア語古写本・文書の調査、東は日本から西はイベリア半島までの多言語原典資料の収集、考古・美術・工芸品等の資料の把握作業を継続し、商人や留学生レベルでの東西交流、駅伝網、モノそのものの動きの実態を明らかにする。

3. 研究の方法

資料収集

国内外の所蔵機関に赴き、13 - 15 世紀の漢文資料、抄物、ペルシア語・アラビア語資料、テュルク・モンゴル語資料、ヨーロッパ諸言語資料の調査・収集につとめる。機関によってはホームページ上で、各種貴重資料のカラー・デジタル画像の公開サービスをはじめている。そうしたのも小まめにチェックする。

漢文資料については、元刊本を中心に、それを覆刻・重刊した明刊本、朝鮮版、五山版、抄本なども含めて、未公開の各種資料を徹底的に調査・収集し、それらがどういう経緯で記述・出版されたのか資料そのものの性格を絶えず反芻・検証しながら利用し、既知の資料の位置づけも見直す。同時に、東洋文庫や京都大学人文科学研究所に蔵される膨大な中国歴代の地方志から、さらには拓本をはじめとする石刻資料、考古発掘報告、朝鮮王朝実録や文集などの朝鮮資料、日本の中世・近世の公家や僧侶、儒学者たちの抄物・日記・随筆等から、モンゴル時代に関わる記事を抽出・整理する。

いっぽう、ペルシア語、テュルク語等の資料については、13 世紀—15 世紀の古写本を中心に、できるだけ最古最良のテキストを選ぶことを心がけながら、歴史書・系譜等の柱となる文献はもとより、医学・薬学・数学・工学・農学など科学技術に関する資料、中国との交流を直截に示す実物資料、ならびに当時の世界認識や交通ルートを示す地図のほか、中国絵画の影響が強いミニアチュール、モンゴル朝廷の諸制度・文物を描く細密画の入ったテキストの調査、カラー写真による撮影・複写の申請を行う。フレグ・ウルス、ジョチ・ウルス(Kipčak-khan 国)と通商・外交使節団の交流があったヨーロッパ諸国 ビザンツ帝国やローマ教皇庁、ジェノヴァ、ヴェネツィア、シチリア、アラゴン・カタルーニャ連合王国、フランク王国、マムルーク朝等の根本資料、研究文献、イランやトルコ、ロシアの発掘報告や美術書の収拾も行う。また 18 - 20 世紀半ばにいたるまで、東方拡大を争って目指した“近代帝国”のフランス、イギリス、ドイツ、ロシア、イタリアには、国力を投入してなされた外交・通商文書、地図・言語資料にかかわる分厚い調査・研究の蓄積がある。じつはこれらの把握と利用は、西洋史の分野であってもほとんどなされていない。幸いなことにそれらの多くは、インターネット上で無料ダウンロードが可能になったので、より徹底した収集に努める。

以上の作業を通じて、ユーラシアの東西に網状に敷かれた駅伝ルート、およびそのシステムを再考するほか、『集史』の「中国史」のネタ本となった漢籍、マルコ・ポーロの『百万の書』(フランス国立図書館所蔵の最良とされる写本に拠った『世界の記述』が通称となりつつあるが、同時代のイタリア語の年代記に掲げられる書名を優先)のネタ本となった大元ウルス治下の情報に詳しいフレグ・ウルスのペルシア語史書 タナヤカフア、コンスタンティノーブルなどに駐留するヴェネツィアやジェノヴァの大使・商人たちが入手・翻訳したと考えられる を特定・発見できれば、まさに「知」の東西交流を具現する成果となろう。

漢籍・ペルシア語・アラビア語・テュルク語・モンゴル語・ヨーロッパ諸語資料中の外来語の分析

三年間に互る「モンゴル時代を中心とする東西資料の外来語分析」の研究で取った手法 ペルシア語、アラビア語、ヨーロッパ諸語資料中のテュルク・モンゴル語、漢語、契丹語等、漢籍中のペルシア語、アラビア語、テュルク・モンゴル語を抽出・整理し、相互に徹底的な比較・照合・分析作業を行い、モンゴル時代の政治・軍制・経済・文化のシステムと実態をひとつひとつ明らかにしてゆく は、『元史』の「本紀」や「志」の再編纂の作業にきわめて有効であること、実証されたので、今後もこの作業は継続する。また、最終年度にこれまで集積・整理したアラビア文字による 13 - 14 世紀の漢字の音価表を作成し、中国語学の研究に供する。この音価表は、同時代のウイグル文字で表記された漢字音とともに、こんご出現・発掘される、あるいはモンゴル時代の前後の非漢語文献の中に音訳される中国語の本来の漢字、人名や地名

を推測する作業に役立つだろう。

訳注

『集史』、『ヴァッサーフ史』、『オルジェイトウ史』のペルシア語史書の大元ウルスに関わる記事を抽出し、漢文資料はもとより、諸ウルスが世界の各国、たとえばヨーロッパ諸国・マムルーク朝と取り交わした国書（テュルク・モンゴル語原文とそれぞれの現地語による翻訳、返書はラテン語やアラビア語で記される）関連の多言語原典資料群と逐一照合し（それぞれ乾嘉時代の清朝考証学のレベルでの関連資料の博搜、重要語彙の解説・分析をめざす）使節団の目的、人員構成、ルート等を可能な限り明らかにする。近年、研究代表者が呈示した訳出法

モンゴル語原文の存在が推定されるものについては、『元典章』や『通制条格』、『至正条格』等の政書に見える口語漢語の語彙によるモンゴル語直訳の文体を用い、訳語の選択にあたっては蒙漢合璧碑をはじめとする現存のさまざまな対訳資料を利用、とうじの翻訳官の方法そのままに、東西の連動を一目瞭然にする をもって翻訳、東は日本から西はイベリア半島までの多言語資料、図像・考古資料を駆使して訳注・年表を作成・呈示する。これによって、政権レヴェルでの東西大交流の実態が明らかになるはずである。

類書・地理書・各種技術書・暦（天文表）等の大元ウルスに関わる記事の抽出、訳注作業を継続し、細密画・挿絵の情報も取り入れながら、ユーラシア東西の具体的な「知」の交流を示す。

4. 研究成果

まず初年次は、『元典章』に収録される有名な1280年発令の「禁回回抹殺羊做速納」をとりあげた。じゅうらい、「モンゴルとムスリムの慣習の衝突」という単純な図式化を以て紹介されてきたが、『元史』、『集史』、『百万の書』を中心に膨大な関連記事を照合・分析してゆくと、背景に二つの集団（世祖クビライの寵臣アフマド・ファナーカティー率いるムスリム集団とチンキム皇太子に期待する高官たちとウイグル商人の集団 その多くはネストリウス派キリスト教徒）の権力と富をめぐる熾烈な闘争があったことがわかる。この禁令の最大の目的は、前者のユーラシア規模の商業活動を妨害することだった。また、アフマド一派を中傷するために、トルイ家の投下領だったブハラやフレグ・ウルスで発生したいくつかのスーフィー教団の叛乱、フレグ・ウルスの官僚たちがイスラームを標榜するマムルーク朝やジョチ・ウルスと内通していた事例が列挙されている。おそらくクビライ自身の本意によるものではなく、事実、チンキムを幽閉するやいなや、この禁令を撤回した。二つの集団の争いは、クビライの死後も続いた。かれの孫アーナダが、ムスリムを装ったのも、チンキムの子成宗テムルと対抗し、且つフレグ・ウルスのガザン・カンや中央アジアのモンゴル諸王等の協力をとりつけながら、次のカンとなるためであった。なお、大元ウルスとフレグ・ウルスの迅速且つ密接な情報のやりとりの傍証として、仏舎利の収集と式典、世界図・海図の製作、モンゴル王族の肖像画の製作、首都設計等についても論じた。また、大きく2系統に分類される『集史』第一部「モンゴル史」の諸写本の成立の順序を、挿絵の観点から見直した。クビライとチンキムの不和の一因となった大醜聞についても指摘した。

二年次の最後には、これまでの科研費若手研究（B）『『元史』の志と表の再編纂 大元ウルスの政治と文化の解析』、基盤研究（C）『東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証』、『モンゴル時代を中心とする東西資料の外来語分析 中国歴代正史の精確な理解にむけて』の成果に、本研究の中間報告・知見を加えた学術書（菊版で約1200頁）『モンゴル時代の「知」の東西(上)(下)』を公刊した。

序章に代えて、冒頭で13-14世紀のユーラシアの東西交流を具現する多言語の典籍・碑刻・図像・出土文物・工芸品・美術品等の資料をカラー画像で40件ほど取り上げ、ペルシア語古写本、イタリア語・フランス語資料、漢籍、日本の中世年代記・日記・抄物の記述（学界未知の文献も含む）を以って詳細かつ平易な解説（原稿用紙にして約200枚）を施すことによって、研究全体の見取り図とした。ちなみに、この学術書は、本田實信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会 1991年）へのオマージュでもあり、附論も含めて同数の23篇（書き下ろし5篇）を収録した。後進に投げかけられていた課題のいくつかは、四半世紀を経過し、資料状況の激変に伴って回答の呈示が可能になったからである。とくに、中国科学史、中国史等の分野での利用に供するべく、フレグ・ウルスのマラーガ天文台とナスィールウッディーン・トゥースィーの『イル・カン天文表』に関する資料、ラシードウッディーン・ハマダーニーが編纂官として14世紀初頭に著した『集史』の「南宋遠征」の記事、農書 *Āsār va Ahyā'* 『踪跡と生物』の中国に関わる記述、*Tanksūq nāmāh* 『珍貴の書』 中国独特の医薬書で挿絵の豊富な李嗣『脈訣集解』、王惟一『銅人腧穴鍼灸図経』と『大元本草』、1271年まで使用されていた金朝の『泰和律令』を選んでペルシア語に翻訳した叢書 の80葉に亘る序文の重要な箇所について、詳細な訳注を呈示した。可能な限り、日本人の多くにとって読解が容易でないペルシア語資料、ヨーロッパ諸語資料については、註での引用であっても、写本間の異同とともに翻訳を提供し、漢文には、訓読もしくは人名・地名等固有名詞に下線を施し、外来語にルビを附すことを原則とした。できるだけ多くの一次資料・学界未知の貴重な資料を紹介すること、引用文献の重複を避けるよう心がけて編集した。諸般の事情により、校正が不十分なままの刊行となったことが悔やまれるが、上梓から時を置かずして、韓国・中国・台湾・香港・日本・沖縄の6つの地域で構成される「東アジア出版人会議」から、当該領域の出版文化に寄与するものとして表彰を受けた。

内容そのものについては、一定の評価を得られたことになるうか。

また、この学術書の内容を一般向けに要約した講演・文章化を複数行い、高校世界史の副教材の分担執筆にも活かした。執筆にあたっては、最新の情報も紙幅の許す限り紹介し、たとえば旧エスィナ路（内蒙古カラ・ホト遺跡）の砂塵から発掘された文書断片群について、これまでに国内外で収集した元刊本と照合することによって、いくつかの漢籍書名とテキストを特定した。チンギス・カンの西征を契機として、金末元初に革新的な展開を見せた中国数学 高次方程式を扱う“天元術”，球面三角法、それにもとづいた新暦の編纂、江戸時代の和算に与えた影響等についても、科学雑誌に寄稿した。さらに三年次の研究成果を補充した一般書（単著）大学の中国史の教材（分担執筆）を鋭意準備中である。グユク・カンがインノケンティウス4世に当てる国書（ペルシア語版）の日本語訳を、高田英樹『中世ヨーロッパ東方記』に提供した。書籍全体の趣旨・体裁統一のため、詳細な注釈を附すことはできなかったが、プラノ・カルピニのジョヴァンニが伝えるモンゴル語原文からラテン語への翻訳方法を意識して、『元朝秘史』、『華夷訳語』、現存する国書の数々を参考に、もとのモンゴル語（散逸）を推測しながら、敢えて『元典章』等に使用されている直訳体漢文を以て翻訳した。

なお“研究成果の社会還元”の一環で、歴史の専門知識が特に文学の解釈や近現代社会の理解にいかん役立つかの具体例として、本研究課題の知識を以て、アガサ・クリスティの諸作品を解析する試みを行った。時代背景、人物設定、調度品の多くは、かのじょが実際に経験、見聞きし、親しんでいたもので、その描写のリアリティこそ、最新もしくは記憶に新しい時事ネタを取り込みアレンジする手法とともに、人気を博した理由だったこと、逐一、例を挙げて実証した。特に短編に登場する“鷲の巣” イスマーイール派の山城は重要な手がかりであり、ハンマー・プリュグシュタル、女探検家のフレイヤ・スターク、本田實信にいたるまで、研究史を整理しなおす絶好の機会となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 宮紀子「『元典章』が語るフレグ・ウルスの重大事変」『東方学報（京都）』91 2016年12月 pp.450-309.
2. 宮紀子「虫眼鏡でアガサ・クリスティを覗いたら」『図書』817号 岩波書店 2017年3月 pp.34-38.
3. 宮紀子「和算の源流をもとめて——『モンゴル時代』の贈り物」『科学』vol.87-10「特集シルクロード：交流を復元する」岩波書店 2017年10月 pp.940-947.
4. 宮紀子「“鷲の巣”からアガサ・クリスティを眺めると」『図書』844号 岩波書店 2019年4月 pp.6-11.

〔学会発表〕(計3件)

1. 宮紀子「モンゴル時代の書物の道」第12回京都大学人文科学研究所 TOKYO 漢籍 SEMINAR 「漢籍の遙かな旅路——出版・流通・収蔵の諸相——」一橋講堂 2017年3月18日
2. 宮紀子「“鷲の巣”からアガサ・クリスティを眺めると」京都大学人文科学研究所夏期講座「名作再読——いま読んだらこんなに面白い」京都大学人文科学研究所共通第一講義室 2018年7月14日
3. 宮紀子「モンゴル時代史研究からアガサ・クリスティを眺めると」富山大学人文学会言語文化講座講演会 2018年9月25日

〔図書〕(計5件)

1. 池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』山川出版社 2016年11月 365p (宮紀子「古今東西の『知』の統合：ラシード＝アッディーン『集史』」, 「東西文化の邂逅：李志常『長春真人西遊記』」, 「コロンブスをも魅了した東方の驚異：マルコ＝ポーロ『世界の記述』」, 「諧謔の旋律：関漢卿ほか“元曲”」, 「チンギス・カン讃歌——モンゴル版『古事記』:『元朝秘史』」, 「中国史入門のベストセラー：曾先之『十八史略』」pp.159-161, pp.189-203.)
2. 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西(上)』名古屋大学出版会 2018年2月 574p.
3. 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西(下)』名古屋大学出版会 2018年2月 600p.
4. 東アジア人文情報学センター編『漢籍の遙かな旅路——出版・流通・収蔵の諸相』研文書院 2018年3月 188p (宮紀子「モンゴル時代の“書物の道”」pp.186-142.)
5. 高田英樹編訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会 2019年1月 (宮紀子「インノケンティウス4世宛グユク返書」 pp.100-102.)

〔その他〕(計1件)

- 第7回パジュ・ブック・アワード（著作賞）受賞 2018年9月15日

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。